

[成果情報名]山菜「ヤマウド」の実生を利用した増殖と栽培技術

[要約]「ヤマウド」の実生による栽培方法を確立した。実生繁殖により 1 株から約 2,000 株の成株が得られる。採種後、30 日程度低温湿潤処理した後、12 月に播種して翌春定植すると、定植翌年から収穫できる。マルチ栽培とし、窒素施肥量は基肥 10kg/10a、追肥 5kg/10a とする。

[担当]総農セ・高冷地振興セ・野菜作物科・石川寛人

[分類]技術・普及

[課題の要請元]各直売所生産組合、中北・峡南農務事務所

[背景・ねらい]

「ヤマウド」は、食感と独特の香りにより古くから親しまれている山菜である。軟化ウドに比べ香りが高く自然味が感じられる品目として人気が高く、植え付け後の栽培管理が省力的な品目であるため、高齢化の進む中山間地等において導入されている。しかし、増殖は株分けであるため増殖率が低く、株堀上時に労力がかかる。一方、実生繁殖は大量増殖可能であるがその栽培方法は未確立である。

そこで、山菜類の産地化に向け、生育が早い草本性の山菜「ヤマウド」について実生を利用した栽培方法を検討する。

[成果の内容・特徴]

1. 実生による増殖効率は株分け繁殖と比較して高く、2 年後には 1 株から約 2,000 株の成株が得られる。(表 1)。
2. 採種は 10 月下旬から 11 月中旬に熟した果実を採集し、これを押しつぶして種子を取り出す(図 1)。採種量は、1 株当たり 7,000 粒程度である(データ略)。
3. 播種は、30 日程度の低温(5℃)湿潤処理後に行う。発芽率は 80%程度である(データ略)。
4. 播種期は 12 月、定植期は 5 月とし、窒素施肥量は基肥 10kg/10a、追肥 5kg/10a でマルチ栽培とする(表 2、3)。

[成果の活用上の留意点]

1. 播種、育苗は本葉展開まで無加温ハウス内の温床ビニールトンネル内で行う。本葉展開後は、凍害を受けない程度の温度で管理する。
2. 定植は、畝間 180cm、床幅 100cm、株間 60cm(930 株/10a)とする。
3. 実生繁殖による株のばらつきは、直売向けとしては問題とならない。
4. 「ヤマウド」の増殖用の原種苗は種苗店などで入手可能である。

[期待される効果]

1. 農産物直売所などで販売品目が充実し、地元農産物の消費や売上が伸び、農家経営の一助となる。
2. 「ヤマウド」の苗の増殖が容易になることで、導入拡大が図られる。

[具体的データ]



写真1 収穫物



写真2 果実



写真3 種子

表1 増殖効率の比較

繁殖方法	親株1株からの 得苗数	10a分の苗に 必要な親株数
実生繁殖	2,333株	1株
株分け繁殖	4株	233株

※採種量7,000粒/株、播種量3粒/セル、栽植密度930株/10aとして算出

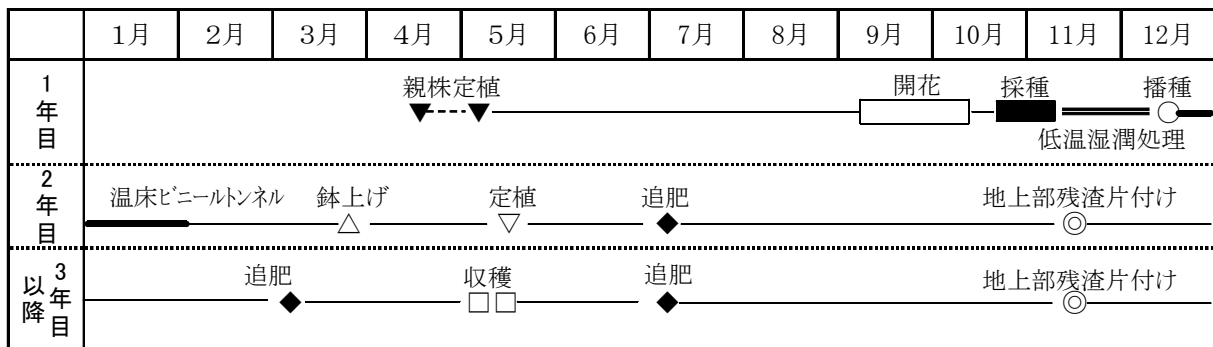


図1 ヤマウドの実生繁殖を利用した栽培

表2 播種、定植日と収量(2009・2010年)

播種日	定植日	収量 (kg/10a)
12/1	5/15	947
2/16	7/3	480
4/22	8/14	63

※耕種概要: 畝間180cm、株間60cm、1条植え(930株/10a)
 施肥量: 窒素15kg/10a、リン酸15kg/10a、加里15kg/10a
 裸地栽培
 ※本葉展開後、最低温度2℃のハウスで管理

表3 マルチ栽培における基肥窒素施肥量がヤマウドの収量に及ぼす影響(2011年)

基肥窒素 施肥量 (kg/10a)	収量 (kg/10a)	収穫物		
		太さ (mm)	長さ (cm)	1本重 (g)
20	826	19.5	41.1	129
10	1025	20.4	44.8	148

※耕種概要 播種:2009/12/11 定植:2010/5/14
 追肥:2010/7/8 収穫:2011/4/28~5/6
 追肥窒素施肥量:5kg/10a

[その他]

研究課題名: 新規山菜類の選定と栽培技術の確立

予算区分: 県単

研究期間: 2008 ~ 2011年度

研究担当者: 石川寛人、窪田哲、對木啓介